

講演

金融リスクの計量化 理論と実際

東京大学大学院数理科学研究科教授 楠岡 成雄

日本アクチュアリー会年次大会 特別講演

平成 26 年 11 月 6 日 経団連会館

(本稿は日本アクチュアリー会年次大会特別講演の記録に、日本保険年金リスク学会会長講演(平成 26 年 11 月 1 日)の内容を加味して加筆修正されたものです)

ただいまご紹介にあずかりました楠岡でございます。

最初に、私事に属することかもしれませんが、近年、大学においてアクチュアリー教育というものが非常に盛んになってまいりました。各大学の数学教室においてアクチュアリー教育というものがなされております。しかし、大学の中にアクチュアリー教育がしっかりできる人はほとんどおりませんので、多くのアクチュアリーの方に、東京大学をはじめいろいろな大学で講義をしていただいております。私は大学の数学の代表でも何でもありませんが、私自身が東京大学でアクチュアリーに関する教育を始めたときに、日本アクチュアリー会より講師の方々を紹介していただきましたので、この場をかりて、高いところから恐縮ですが、お礼を申し上げます。

さて、私は金融リスクの計量化に関する研究をもう十数年前からやっておりますが、これは非常に重要な問題でありながら、なかなか話が進みません。金融リスクの計量化については、非常にはっきりとリスクの計量化ということを最初に述べたのは、マルコビッツ氏かなと思います。この場合はポートフォリオの収益率の平均と分散を考え、分散をもってリスクと捉えるという考え方でした。ただ、これはどちらかという投資理論であります。もう少しリスクの計量化というものについて踏み込んで考えた最初のものは何かと調べましたところ、ビュールマン氏の 1970 年のリスク理論の有名な本 [2] の中で述べられている Premium calculation principle が最初のものようです。1980 年にガーバーという方も本 [3] で同じようなことを書かれているようですが、残念ながら、ガーバー氏の本は東京大学の図書館にはありませんので、いまだにこの本に目を通したことがありません。